金と銀の国ジパング

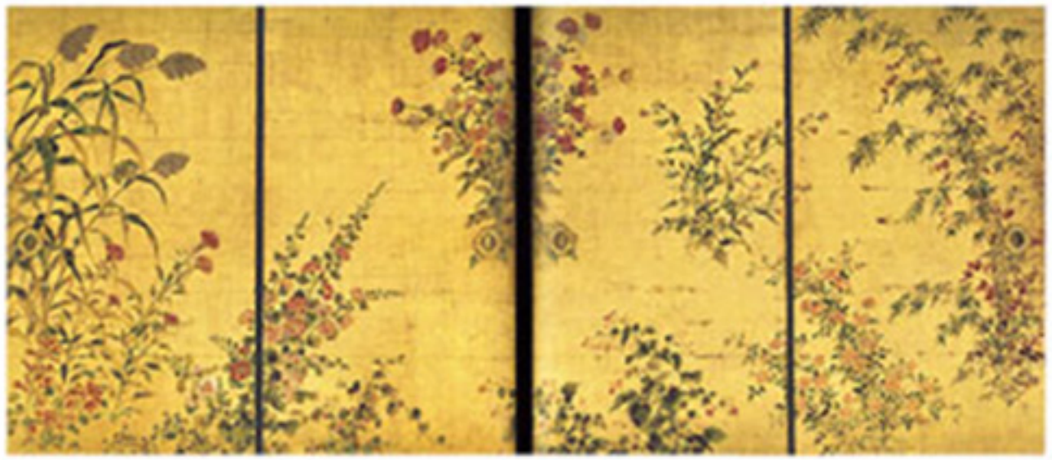
輝きと きらめきの美術

2017年
4月15日(土)—
5月28日(日)

開館時間　午前10時～午後5時
（入館は午後4時まで）
休館日　月曜日（ただし4月3日(月)は開館）
観覧料　一般 1400円
高大生 700円
小中生 500円
※20名様以上の団体は一般1200円割引
※土曜日は小中学生入館無料

主催　徳川美術館・名古屋市蓬左文庫
協力　中日新聞社
名古屋市文化振興財団

徳川美術館 THE TOKUGAWA ART MUSEUM
蓬左文庫 HOSA LIBRARY



5/16～28

威厳と風格を象徴する 金

渋さと清らかさを併せもつ 銀

金銀鎺宝相華文透彫拵
個人蔵

慶長大判
徳川美術館蔵

享保小判
個人蔵

重要文化財
金地亀甲繋文脇刀拵
個人蔵

前期
重要文化財　日月山水図屏風
金剛寺蔵

重要文化財
色絵釘隠
伝野々村仁清作
京都国立博物館蔵

重要文化財
金銅蓮華形磬
大和文華館蔵

金銅尾長鳥宝相華
唐草文華鬘
個人蔵

金銅孔雀型装飾金具
個人蔵

重要文化財　色絵山寺図茶壺
野々村仁清作
板津美術館蔵

蒔絵付箔押絵基箱
徳川家康所用
徳川美術館蔵

金と銀の美意識

「金」は長い年月を経ても変化することがなく、その性質から神秘性が付加され、崇高な輝きは太陽の光をイメージさせ、王者の威厳と風格をも象徴してきました。「銀」は、古代においては金よりも価値が高く、また「しろがね」と称され月の光に喩えられる清新な輝きとともに、「いぶし銀」という言葉に代表されるように、渋く奥行きのある輝きは、今日に至るまで金とともに特別な金属・色として享受されてきました。貨幣はもとより、仏像や経典、あるいは堂内装飾をはじめとする荘厳具、金碧の障屏画、蒔絵や沈金などで加飾された調度品、純金・純銀の器類、金襴や縫箔による装束や衣服類、刀装具や甲冑、鐔や首輪などの装身具に用いられてきた「金」と「銀」の日本における文化史をたどりつつ、その根底にある美意識を探求していきます。

前期
重要文化財　鶴図下絵和歌巻
絵　俵屋宗達筆
書　本阿弥光悦筆
京都国立博物館蔵

後期
国宝　十二天部像のうち　帝釈天
京都国立博物館蔵

地蔵菩薩像
個人蔵

前期：4月15日～5月7日　後期：5月9日～28日　※都合により展示期間を変更する場合があります。